

こ だ か ら つ う し ん 子 宝 通 信

創刊号

平成23年6月1日発行
社会福祉法人嬉泉
世田谷区船橋1-30-9

子育てアイウエオ

子どもの生活研究所所長 石井哲夫



ア、愛情を考える

『子ども』ってうるさいし、分からず屋だし、自分勝手なのになぜかわいいのか。大人から見れば『まだ幼いから仕方ない』と許す気持ちが働くのだ。良い親の姿を見ると、これはものすごい。自分ですることはキチンとしているし、その上忙しく気が立っているのに、子どもには仕方がないと受け入れている。本当にすばらしい人間の良さだと思ってしまう。『自分もこういう時があったのか』と不思議に思ってしまう。

でも、泣いている子どもを見ると、傍にいる大人に『何で泣かせてしまうのか』そんなに大人の言い分を譲らずにいることが本当に『子どもが育つ上で良いこと』と思っているのか、等と、今度は親を責めてしまう。『実にへたくそな子どもの気持ちを分かつとしない自分中心の親ではないのか』などと思ってしまう。事情も分からないのに親を責めるなどは分別のないこと。子どもは、どんな親でもその傍で育つものだ、虐待やネグレクトさえなければ、親権を尊重しなければならない。少しぐらい泣いたって、子どもは、それが社会の掟なんだと親に従わせることが今の常識だ。親は、子どもにとって神様のように少しばかり法律や社会の常識を意識すれば、我が子をどのようにもすることが出来るのだ。何人も並みに道具がそろわず、台所の流しを湯船にしても、トイレを道具入れに兼用しても、人に見せなければ、「うちは貧乏だから」と言うことで済むし、でも、又あまり目立たないように意地悪をしても、どんなに汚くなったことでも自分でさせて『しつけは必要』と済ましてしまう人もいと聞いた。これは親とはいえないが、『愛情があるから』という一言で許されてしまう。親って、本当に子どもに対して愛情を持っているのだろうか、私の子ども達はいずれも40を超えている。この間私が子どもが可愛くてたまらないと思った期間はせいぜい中学生までであった。その後の彼、彼女の生活についてはほぼ無干渉であったと思う。

それが未だに幼い時の感覚を呼び戻すことがあるので驚いてしまう。夢中で可愛がって、『盲目の父性愛』と自称してはばからなかった頃が懐かしい。その頃の子どもは誠に可愛かった。子どもは無条件で可愛かった。しかし家内はそうはいかなかったようである。それでも彼女は、子どもをがみがみ叱るようなこともなく誠に平和であった。子どもへの愛情は家庭の平和をもたらすと言うことで、可愛がられた子どもは甘やかされたことになるとは近視眼的発想で、家庭の平和こそ良い子育ての必要条件で、それは子どもを巡って愛情が大きく作用するからである。